

なかった。このようなことを知ったとき、私の脳裏にはまた「思い出を君に託そう」が蘇ってきた。かつて想像していたように、自分の死を予期した病人が故郷を想うというイメージではなく、ロンドンで多忙で不幸な日々を送るグレイアムがクッカム・ディーンのテムズ河畔の柳の古木を案じているというイメージが、この詩とメロディから浮かび上がってきたのであった。

グレイアムはその後、クッカム・ディーンに邸宅を購入し、そこからロンドンに通勤するようになるが、この頃クッカム・ディーン界隈に昔の風景を見ることはすでにできなくなっていた。ほどなく彼は健康上の理由もあって銀行を退職し、専業作家となる。その直後に出版された『たのしい川べ』はこの作者にとって、テムズ河畔の失われた風景、すなわち自分の失われた幼年時代を永久保存する試みでもあったのだろう。「思い出を君に託そう」の歌詞が『たのしい川べ』やグレイアムの生涯を念頭に置いて書かれたのか否かは不明だが、この詩とこの童話、そしてこの作者の生涯は私の中で確かに共鳴している。



テムズ河畔の田園風景
(クッカム・ディーン付近)

『ギリシア・ローマ神話』と 現代（１） 花に変身した美少年たち

経営学部

山田 晶子

【はじめに】

今から4000年以上も前のこと、古代のギリシアではキリスト教とは異なった神々が信仰されていた。ギリシアがローマ帝国に征服されると、神々の名前は変わったがその性質はほとんど同じままで、信仰は受け継がれた。キリスト教が支配的になった西暦1世紀頃、この古代ギリシア・ローマの神々への信仰は廃れてしまったが、その神々の物語は『ギリシア・ローマ神話』として21世紀の今まで読み継がれ、世界各国で多くの言語に翻訳され、現代までの文明・文化へ計り知れない程の影響を与えてきた。西洋文明・文化を理解する上で、『ギリシア・ローマ神話』は必須の読み物であり知識の宝庫である。そしてもちろん、これらの物語は東洋・南米・アフリカ・極北への理解にも欠かせないものである。『ギリシア・ローマ神話』の集大成として有名な書物にオウィディウス（Ovid43B.C.~A.D.17?）の『転身物語』（*Metamorphoses*）がある。筆者は学生時代にこの書物の翻訳と出会った。これが初めて邦訳出版された時に、英文学の授業で岩崎宗治先生（シェイクスピア研究の大家）が紹介してくださったので、早速購入して読みふけた（『ギリシア・ローマ神話』そのものは、子供のときから好きで読んでいたが）。素敵な挿絵も魅力的であった。題名が『転身物語』とあるように、『ギリシア・ローマ神話』では、登場する人間が、神々の罰や気まぐれあるいは憐れみからさまざまな植物・動物等の自

然物に姿を変えられた。今回のエッセイでは、人間が美しい花に変えられた物語のうちから、アネモネに変えられたアドニス、水仙に変えられたナルシスの話を紹介したい。

【ヴィーナスに愛された美少年アドニス】

ヴィーナスは愛と美の女神として日本でも広く知られている。歌謡曲の題名にも使われているくらいである。そして絵画や彫刻の題材としても有名である。「ミロのヴィーナス」はルーヴル美術館に入っているが、筆者はパリへ旅行に出かけた昔、それを拝見した。ゆったりとした体つきで、「お母さん」のような包容力を感じさせる姿である。ポッチチェリ (S. Botticelli) の名作「ヴィーナスの誕生」に描かれた初々しい乙女のヴィーナス像とは対照的である。ヴィーナスはラテン名の英語読みであり、ギリシア名はアフロディティである。

さて、ヴィーナスに愛されたアドニスの物語では、ヴィーナスは母親として登場する。息子は「愛の使い」のキューピッドで、ギリシア名はエロスである。キューピッドはラテン名の英語読みである。キューピッドは、「愛の喜びの使い」というよりも「愛の悲しみの使い」と言った方がふさわしいのではないだろうか。と言うのは、キューピッドは金の切っ先の矢と鉛の切っ先の矢の付いた2種類の矢を持っていて、それらを自分の好みで使い分けて、その矢に射られた神や人間を苦しめるのである。たとえば太陽と音楽と薬とスポーツの神として有名なアポロは、キューピッドを怒らせたために鉛の矢を射られて報われない恋に苦しんだ。

そしてヴィーナスとアドニスの物語も悲恋であった。キューピッドの母親であるヴィーナスは、息子を抱きしめたときに金の切っ先の付いた矢で偶然胸を刺されたが、痛くもないので気にしていなかった (キューピッドの矢は射られたときは痛みを感じないのだ)。しかし彼女は、矢で射られた直ぐ後に見た少年、若くて美しいアドニス (多分15.6歳であろう) を見てたちまち恋に落ちてしまっ

たのである (恋は偶然人を襲うのである。意識的に恋をすることはできない)。だがこれはヴィーナスの片思いであった。アドニスはただ狩りに夢中の美少年で、物語ではヴィーナスの側からの呼びかけがあるばかりで、アドニスが彼女を恋しているとは書かれていない。しかし嫌ったとも書かれていない。ヴィーナスが年上であると感じさせる話で、姉のように彼を気遣っているのが分かる。二人の間には性的な関係はなかったような感じである。

ヴィーナスは、イノシシやライオンや熊などの獰猛な獣からは離れているように、とアドニスに注意を与えたが、彼はそんな戒めも気にかけずに、あるときイノシシの牙にかかって命を落としてしまう。悲しみにくれたヴィーナスは、その女神としての力によってアドニスの血から赤いアネモネの花を咲かせて彼の思い出を永遠に留めた。女神に愛されると身を変えても永遠の命を授けられるのである。アネモネは春に咲く花で、花屋さんでも売っている。今は赤や紫や白などの様々な花がある。神話ではアネモネはアドニスのはかない一生を思わせるように風が吹くとサッと散る花であるが、現代では品種改良のためか長持ちするようである。

【美しすぎて不幸な恋をした少年ナルシス】

もう一つの悲恋は、これも美しい少年であったためにかえって不幸に見舞われたナルシスの物語である。ナルシスは少年でアドニスと同じく15.6歳であると思われる。彼も狩が好きで少年で、仲間の少年たちと森を駆け回っていた。彼を愛した者は、男女を問わず多かった。しかし彼は誰にも心を動かさず、特に「こだま」の意味として英語に残っている森の妖精エコー (echo) の悲恋は哀れである。彼女はナルシスに恋をしたが振り向いてもらえず、悲しみのあまり体が痩せ細ってついには消えてしまい、声だけが残ったのである。

ナルシスを恋した男女は、報われない恋の苦しみのために、とうとう彼を憎むようになった。そして彼にも自分たちと同じ報われない恋の苦しみ

を味わわせて欲しい、と神に祈った。すると復讐の女神がこれに応えたのである。ある日、ナルシスは静かな森をただ一人さまよっていたが、どういふ訳か道に迷ってしまう。そして洞穴からきれいな清水が湧き出て木陰の下にできた泉までやってくる。喉が渇いていたので、ナルシスは水を飲もうとして泉にかがみ込むと、その表面は鏡のようで、彼の姿が映っていた。しかしナルシスはそれが自身の姿が映ったものとは知らなかった。大昔には鏡の存在がまだなく、神だけが知っていたと思われる。

その結果、ナルシスは水面上の美しい姿に恋をしてしまうのである。自分自身に恋をしたナルシスの悲劇がここに始まった。決して報われない恋であった。彼は水面から動くことができず、とうとうそこで死んでしまう。そして彼を哀れに思った神がいて、死骸から水仙（英語でナーシサス）が咲き出た。ナルシスは水仙の花に変身したのである。現在水仙には約1000種もあり、ラッパ水仙とは異なっている。日本では、越前岬などに咲くもので、一本の茎から白い小さな花がたくさん咲く種を指すと言われる。「自己愛」の意味の「ナルシズム」という言葉はここから生まれたのである。

【終わりに】

以上、花に変身した話を二つ紹介した。考えてみるに、恋は楽しいときは短く苦しいときの方が長いものではないだろうか。恋し愛した人と結ばれてもその喜びは永続しないものだ。永続させるには努力が必要であるし、そのときその愛情は、一瞬に感じた恋の激しい歓喜とは種類が異なったものになる。そして恋とは、意志に関わりなく陥るものであるから、人間の、恋との関係は永遠に続くものである。そして芸術の永遠の源となるのである。

参考：オウィディウス著 田中秀央/前田敬作訳『転身物語』、人文書院、1966年

60年ぶりに再建なった ドレスデンの聖母教会 (2005年10月30日)

経営学部

島田 了

エルベ河畔のフィレンツェと呼ばれる芸術の街ドレスデンにひときわ目立つ建築物があった。プロテスタントの聖母教会である。当時の教会の丸屋根は木組みに銅版をかぶせたものが普通であったが、この教会は丸屋根全体が明るい色の砂岩でできあがっていたのだ。この教会を設計したのはドレスデンの大工長ゲオルク・ベアー、設計当時57歳で経験は豊富だったが、ほとんど無名の建築家だった。彼についてはほとんど資料が残っておらず、肖像画さえ残っていないという。実際、彼に設計を任せるにあたって反対もあったし、妨害もあった。設計が彼に決まってからも、石の丸天井については反対が多かった。しかし彼は粘り強く交渉を続けるなどして、石の丸天井を決してあきらめなかった。そして資金難にも負けず、彼は私財を投じて教会の完成へと努力した。結局、彼は完成前の1738年3月16日に貧困のうちに息を引き取ることになる。しかし彼の主張どおりの石造りの丸屋根は完成し、1743年5月23日の完成以後、その美しくも堂々たる姿から「太った貴婦人」(dicke Dame)の愛称でドレスデンの人々に愛され続けてきたのだった。

この教会は、7年戦争やナポレオン戦争、そして第1次世界大戦にも被害にあわなかった。第2次世界大戦末期になって、ベルリン、ケルン、ハンブルク、フランクフルトなど他の多くの大都市が爆撃で壊滅的な被害を受けていたときでも、ほとんど被害を受けていなかったのである。